

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5.裸のマハ

5-1

いつもと違う昌幸の口振りに、真紀は「わかりました」と答えるしかなかった。

「恩に着るよ。五反田についたら地下鉄に乗り換えるから、店には一時間後位になると思うけど、いいかな？」

「間に合わせるわ」

「真紀……」

瞬時、沈黙があった。

「はい？」と真紀は部屋着を脱ぎながら聞き返した。

「愛してるよ」

「……」

「君に会えて本当によかった」

「昌幸さん、何かあったのね？」

「いつもと同じさ。言っちゃ悪いのかい？」

「いいえ、とても嬉しいわ」

「ありがとう」

奇しくもこれが、昌幸と真紀の最後の会話となった。

その日、二人でランチを済ませた後、真紀は五反田まで昌幸を送り届けると、東京都庁と対峙する「新宿パークタワー」へ車を走らせた。

昌幸には、昔お世話になった人と会うと伝えておいたが、実は、ひと頃愛憎劇を演じた日本画家の横田の代理人であり画商でもある朝倉が約束の相手だった。

新宿パークタワーは超高層ビル群の一角にあり、映画『パッドマン』に登場しそうな三角屋根の外貌が目印となっている。三十七階までがオフィスをはじめとするショップや多目的ホールで、三十九階から五十二階までを「パークハイアットホテル」が運営している複合ビルである。

四十一階にある「ピークラウンジ」の全面ガラス張りになっている窓側の席で、すぐにそれとわかる風貌の朝倉が立ち上がって真紀を迎えた。

「お呼び立てして申し訳ない」

「ご無沙汰しております」

「ちっとも変わりませんね……」

朝倉はまぶしげに真紀を見つめた。

ガラス窓に午後の自然光が注ぎこむラウンジからは、眼下に広がる新宿の街並みが観望できた。

黒のスキニーパンツと黒のトップス、浅緑の極太ベルトでウエストを絞り、黒のロングブーツを履いた真紀の優艶な見目形は、大きな仕掛けの中にあっても際立っていた。